

〔課題演習報告〕

音楽科教育における鑑賞指導に関する研究 ーパフォーマンス課題を取り入れた授業の実践ー

小 出 水 志 織

Shiori KOIDEMIZU

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
(2017年1月6日受理)

本研究は、パフォーマンス課題を取り入れることで、生徒たちが客観的な根拠を持って楽曲に対する自分なりの感じ方や価値について表現する力を育むことを支援する音楽鑑賞の授業を計画し、実践することを目的とする。1年次は先行実践研究の検討と授業実践Ⅰを実施した。2年次は鑑賞に関する調査と授業実践Ⅱを実施した。授業実践Ⅰと鑑賞に関する調査から明らかになった授業展開のポイントを授業実践Ⅱに生かしたことで、生徒の記述に音楽に対するイメージと客観的な根拠を結びつけた表現が調査時よりも多く見られた。また、生徒たちの思考と授業構成の視点からも課題の改善が見られた。

キーワード：音楽科教育、音楽鑑賞、パフォーマンス課題、授業実践

1 はじめに

学習指導要領解説音楽編（文部科学省，2008）では、中学校2学年及び3学年の鑑賞活動において、「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評する」ことが重視されている。「根拠をもって批評する」とは、言い換えると、対象となる音楽に対して生徒たちが「自分なりの感じ方、客観的な根拠、自分にとっての価値について述べること」である。また、「客観的な根拠」とは、音楽を形づくっている要素（音色、音高、強弱、リズムなど）や構造を指す。この「客観的な根拠」を用いることで、音楽に対する自己の思いや考えはより説得力を増し、相手に分かりやすく伝えることができる。このことから、音楽鑑賞の指導においては「客観的な根拠」を理解し、それらを自分の思いや考えと結びつける力を育まなくてはならないと考えられる。一方で、平成22年に国立教育政策研究所が行った特定の課題に関する調査では、音楽鑑賞において学習指導要領解説で重視されている「根拠をもって批評する」力に課題が見られる生徒が約7割いることが分かった。このことから、これからの音楽鑑賞の指導においては、自分の考えを説明するための客観的な根拠を見つける力を育むこ

と、さらに見つけた根拠を自分が感じたことや想像したことと結びつけていく力を育むことをめざしていく必要があると考えられる。

2 研究の目的と方法

本研究は、パフォーマンス課題を取り入れることで、生徒たちが客観的な根拠を持って楽曲に対する自分なりの感じ方や価値について表現する力を育むことを支援する音楽鑑賞の授業を計画し、実践することを目的とする。研究の進め方としては、適切なパフォーマンス課題を検討したうえで音楽鑑賞の授業を計画、実践し、班活動の際に生徒たちが記入した学習プリントやグラフ、授業の様子などから実践授業を評価する。

3 先行研究

(1) パフォーマンス課題について

McTighe&Wiggins (2005)において、パフォーマンス課題とは、「効果的に行動するために知識を活用する課題、あるいは、ある人の知識と熟達化を明らかにするような複雑な完成作品を実現する課題」と定義されている。

(2) ワシントン州による実践例

パフォーマンス課題に関する先行研究は、表1

表1 課題「キャットフードのコマーシャル」(要約)

あるキャットフード会社为新商品のキャットフードのCMで使用するテーマ曲を小学生に作ってもらおうと考えています。それに、このクラスが選ばれました。そこで、このクラスのひとりひとりにテーマ曲を作ってもらい、その演奏とどう演奏するかについての説明会を行うことになりました。 担当のCMディレクターは、新商品に合ったテンポ、リズム、強弱を考えて作曲・演奏してほしいそうです。演奏の前には練習時間を設けます。演奏後、ディレクターにテーマ曲についての説明を行ってください。

に示したように、ワシントン州公教育管理局が開発した課題「キャットフードのコマーシャル」がある。小山(2013)ではこれを受け、パフォーマンス課題の利点として以下の3点を挙げている。

- ① ロールプレイ的な課題によって、生徒たちの主体的な参加を可能にする。
 - ② 音楽家としての一連の活動の中で、これまで学んできた音楽の知識や技能を活用できる。
 - ③ 知識・技能を活用する中で、それらを現実場面における生きた内容として理解できる。
- これらの利点は、生徒たちの関心・意欲・態度の育成、基礎的な知識・技能の育成、知識・技能を活用する力の育成につながり、音楽鑑賞における生徒たちの課題を解決するための一助となると考えられる。

4 授業実践 I

(1) 授業の概要

平成27年12月9日、16日に宗像市立日の里中学校、第3学年の生徒117名を対象とし、各学級(全3学級)とも2時間の授業実践を行った。取り上げた題材の概要については表2に、行った授業の流れについては表3、表4に示した通りである。

(2) 教材について

教材として取り上げた2曲は両曲ともに生徒がどこかで一度は耳にしたことのある親しみの持ちやすい楽曲である。『「フィガロの結婚」より“序曲”』については特に曲の冒頭部分、『「白鳥の湖」より“情景”』については曲全体を取り上げた。両曲とも各要素の特徴の変化が明確であり、要素同士のかかわりを根拠として感じ取った曲想を説明しやすい。

(3) 授業展開

①1 時間目の授業展開

1時間目は教材として『「フィガロの結婚」より“序曲”』を取り上げた。生徒へは「日の里名曲

表2 題材の概要

題材名	曲のしくみを理解して、よさを伝えよう
教材	「フィガロの結婚」より“序曲” 「白鳥の湖」より“情景”
題材目標	○ 音楽を形づくっている要素同士のつながりや曲想とのかかわりに関心を持ち、鑑賞の学習に主体的に取り組もうとしている。 ○ 音楽を形づくっている要素同士のつながりや曲想とのかかわりを理解して、解釈したり価値を考えたりし、根拠を持って批評するなどして、音楽のよさを味わって聴くことができる。

表3 1 時間目の授業の流れ

	学習活動・内容	○教師の手だて
導入	1 学習課題の確認と楽曲の鑑賞 ・楽曲の雰囲気	○ プロジェクターを使って課題提示を行う。
展開	2 冒頭部分を形づくる各要素のグラフ化 ・音色 ・強弱 ・音高 3 グラフの全体共有 ・各要素のつながり	○ 要素ごとに4人班に分ける。 ○ 共有の際は、暗号と曲や楽譜とを照らし合わせる。
終末	4 調査結果の記入 ・要素同士や要素と曲想のつながり	○ 考えが進まない生徒には、個別に助言する。

表4 2 時間目授業の流れ

	学習活動・内容	○教師の手だて
導入	1 学習課題の確認と楽曲の鑑賞 ・楽曲の雰囲気 ・旋律	○ プロジェクターを使って課題提示を行う。
展開	2 繰り返される旋律の鑑賞 ・同旋律の回ごとの雰囲気の違い 3 旋律を形づくる要素のグラフ化 ・音色 ・強弱 ・音高 4 グラフの全体共有 ・各要素の変化 ・各要素の違い	○ 雰囲気の違いに注目させるために分割して鑑賞する。 ○ 前回と同じ班に分かれさせる。 ○ 共有の際は、暗号と曲や楽譜とを照らし合わせる。
終末	5 調査結果を記入 ・要素同士や要素と曲想のつながり	○ おすすめポイントを紹介する形で紹介文を書かせる。

表5 課題『フィガロの結婚』より“序曲”』（要約）

＜依頼人の話＞

「亡きおじいさんが大好きだった曲について調べてほしいんです。実はその曲の楽譜におじいさんの字で「変化」という2文字が書かれていたんですが、よく意味が分からないのです。この「変化」が表す意味を調査してください。」

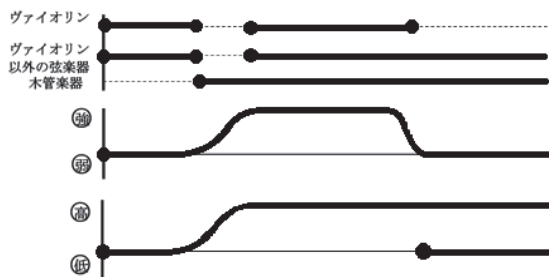


図1 1時間目の音色・強弱・音高のグラフの記入例

表6 課題『白鳥の湖』より“情景”』（要約）

＜依頼人の話＞

「おじいさんの好きだった曲がもう1曲見つけました。そこには暗号が書かれていました。おばあさんが暗号の秘密とおじいさんがこの曲のどこが好きだったのかとても知りたがっています。この暗号の秘密を解いて、おばあさんに教えてあげるためにこの曲のおすすめのポイントを教えてください。」

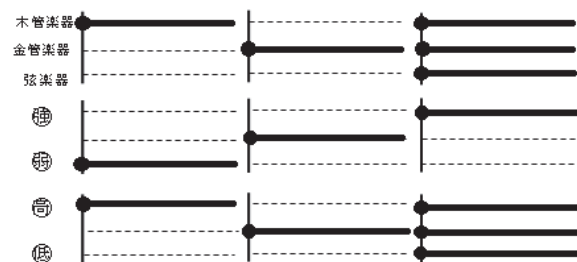


図2 2時間目の音色・強弱・音高のグラフの記入例



図3 2時間目に提示した暗号

探偵事務所」という架空の探偵事務所の調査員になり、曲にまつわる依頼調査と調査報告書の記入を行う課題を提示した。依頼の内容については表5に示した。課題解決にあたり、音色・強弱・音高に着目した。生徒を各班4人ずつの音色班、強弱班、音高班に分け、それぞれの要素が楽曲の冒頭部分の中でどのように変化しているか図1のようにグラフ化させた。

②2時間目の授業展開

2時間目は『「白鳥の湖」より“情景”』を教材として取り上げた。1時間目と同様、探偵事務所調査員として依頼調査を行うという課題を提示した。依頼の内容については表6に示した。また、図2のように2時間目は『「白鳥の湖」より“情景”』の中間部までを鑑賞し、繰り返し現れる同旋律について、各要素でグラフ化した。ここでは、おじいさんが残した暗号として図3を提示した。中間部までには同旋律が5回表れており、●は同旋律を表している。要素や曲想の特徴ごとに5回の同旋律を分けると1つ目、2つ目の●、3つ目、4つ目の●、5つ目の●の3つにわけることができる。そのため、この3つの部分についてグラフを作成させた。この活動のねらいは、本題材の目標である音楽を形づくっている要素同士のつながりや曲想とのかかわりを理解することである。授業の最後には白鳥の湖の繰り返し出てくる旋律について、気に入った部分の紹介文を書かせた。

(4)考察

①パフォーマンスに至るまでの思考過程について
パフォーマンス課題の調査報告書の作成では、1時間目も2時間目も授業の最後に調査結果として「曲の雰囲気」、「雰囲気を引き出している音楽のしくみ」について記述させた。1時間目の生徒たちの様子を見ると、記述にスムーズに取り掛かれない生徒が多くいることが分かった。その原因として、授業の中で曲の雰囲気・イメージに注目して鑑賞する時間を設けていなかったため、曲の雰囲気と音楽のしくみが結びつかなかったのではないかと考えられた。そこで、2時間目には曲の雰囲気・イメージを感じ取るための時間を設けた。その結果、1時間目に比べて2時間目の方がスムーズに調査結果を記述している姿が見受けられた。このことから、パフォーマンスを完成させるにあたり、授業展開の中で、生徒の思考過程に注目して活動を取り入れる必要があることが明らかになった。

②生徒の実態に合わせた学習活動

授業では、調査依頼の課題を解決するための手段として、音色、強弱、音高をグラフ化させる活動を取り入れた。しかし、1 時間目については予想していたよりも時間がかかった。この要因は 2 点考えられる。

1 点目は、個人用と班用で同じグラフを 2 種類作成させたことである。生徒たちの班活動での様子を見てみると、個人用のグラフの作成を中心に行っており、上手く班活動に移ることができていない様子が伺えた。2 時間目はこの反省を踏まえてグラフの作成は班用のものだけに限定した。そうすることで、生徒たちの班活動の目的が統一化され、よりスムーズに班活動ができていた。

2 点目は、生徒たちに音をグラフ化するという活動経験がなかったことだ。2 時間目は 1 時間目の手段を活用したためにスムーズに活動に取り組むことができた。このことから、生徒の実態に合わせた学習活動の計画の必要性を感じた。

5 調査について

(1) 調査の概要

平成 28 年 6 月 22 日に宗像市立中央中学校の第 3 学年の生徒 113 名のうち出席者 106 名を対象に鑑賞に関する調査を行った。調査問題は、国立教育政策研究所（2010）による特定の課題に関する調査（音楽）の鑑賞の問題の一部を用いて作成した。各問題の出題内容は表 7 にまとめた。また、この調査の目的は以下の 2 点である。

①鑑賞における生徒の思考の傾向の分析

②鑑賞指導における生徒への支援の方法の検討

問題は ABC の 3 つの部分で構成されたピアノ曲を聴き、それに対する問題を解答する形式である。音楽 A から音楽 B にかけてはリズムや調が変化しており、音楽 B から音楽 C にかけてはさらに拍子や速度、強弱などが変化することで、各部分でイメージされる天気（空もよう）も変化すると予想された。問題は全 5 問あり、1 問ごとに音楽を聴き、解答時間を設けながら実施した。音楽は最初と最後に 1 回ずつ映像付きのものを聴き、それ以外は音声のみを聴いている。

また、問題 5 では、音楽を聴いて家族や友人などに紹介文を書くというパフォーマンス課題に類似した出題形式をとっている。

(2) 考察

調査の結果から鑑賞における生徒の思考の特徴を以下の 2 つの視点から考察した。

①音楽に対する「イメージや感情」と「客観的な

表 7 出題の内容

問題番号	出題内容	楽曲部分
問題 1	これから聴く音楽は、音楽 A、音楽 B、音楽 C の三つの部分でできています。音楽 A を聴いた感じについて、そのイメージを天気（空もよう）で言い表すとしたら、あなたはどのような天気（空もよう）をイメージしますか。あなたのイメージにもっとも近いものを、下の 1 から 7 の中から <u>一つ</u> 選び、その番号を回答欄に書きなさい。 1 晴れ 2 うす曇り 3 どんよりとした曇り 4 小雨 5 大雨 6 小雪 7 大雪	A
問題 2	音楽 B を聴いた感じについて、天気（空もよう）で言い表すとしたら、あなたはどのような天気（空もよう）をイメージしますか。そのイメージを自由に回答欄に書きなさい。	B
問題 3	音楽 B は、はじめに聴いた音楽 A と比べて、どのようなところに違いがありましたか。その違いについて、下の 1 から 6 の中からふさわしいものを <u>二つ</u> 選び、その番号を回答欄に書きなさい。 1 楽器が変わった 2 リズムが変わった 3 形式が変わった 4 速度が変わった 5 調が変わった 6 強弱が変わった	A B
問題 4	音楽 C を聴いて、もっとも特徴的と思われる音楽の要素を、下の 1 から 6 の中から <u>一つ</u> 選び、その番号を回答欄に書きなさい。また、選んだ要素について、どのような特徴があるか、回答欄に簡潔に書きなさい。 1 リズム 2 拍子 3 強弱 4 調 5 旋律 6 速度	C
問題 5	家族や友人など、あなたがおすすめしたい人に当てたこの曲の紹介文を、次の条件にしたがって回答欄に書きなさい。 <条件> ○ 音楽 A から音楽 B、音楽 C へと順に変化していったときのあなたの気持ちや想像したことを具体的に書くこと。 ○ 音楽の要素を表す言葉を下から <u>二つ</u> 使用して書くこと。 音色 リズム 旋律 音と音とのかかり合い 形式 調 拍子 速度 強弱	A B C

根拠」について

問題 2 では、106 人中 85 人（約 80%）生徒が音楽 B についてイメージを表現できた。一方で問題 4 では音楽 C について、その音楽の特徴的と思われる要素について、その特徴を客観的に表現できている者は 106 人中 66 人（約 62%）いたのに対し、その特徴を心情的に表現できている者は 106 人中 28 人（約 26%）しかいなかった。問題 2 で

表 8 生徒の解答例

	問題 3	問題 5
生徒 A	2, 6	初めは、小雨がふっていてどんよりとしている感じだったけど、だんだんと音色が明るくなり、晴れにかわり、よこんでいる様子が見えます。A, B, C の強弱のつけ方もそれぞれちがってておもしろかったです。
生徒 B	2, 5	A は暗い感じの音色でどんよりとした雲で B は少し音色が明るくなって晴れていくような感じ。C は強弱があって暑いくらいに晴れていて元気な感じになっている。

はイメージを記述している者が多く、問題 4 では記述していない者が多かった要因の一つとして、出題の仕方が考えられる。

問題 2 では、天気や空もようをイメージする手がかりとして記述するよう求めているのに対し、問題 4 では音楽の要素という客観的な根拠を基に記述を求めている。このことから、出題の仕方が音楽に対する「イメージや感情」とこれを説明するための「客観的な根拠」の記述の表れ方に影響を与えていることが考えられる。

②各要素の概念について

問題 3 では、音楽 A から音楽 B における変化した要素としてリズムと調を選択したものを正答とした。その結果、106 人中 95 人（約 90%）の生徒がリズムの変化を選択することができていた。その一方で調については半数以上の生徒が選択できておらず、調という要素の概念に対して課題があることが明らかになった。生徒の各要素の概念理解について考察するために 2 名の生徒（生徒 A、生徒 B とする）の解答例を表 8 に示した。

両生徒に共通することは、音楽を聴いてイメージしたことを天気や空もように例えて表現していること、また、それを音楽の要素として「音色」という言葉で説明していることである。さらに、両生徒ともにイメージした天気や空もようは変化しており、それは「音色」の変化に伴っていることを説明している。

音色とは一般的に音の質を表すものであり、様々な音楽の要素が変化することで、その変化を感じることができる。今回の問題において音色の変化に関して関係している音楽の要素の変化は、リズムや速度、調、強弱などが考えられる。

生徒 A は問題 3 において、音楽 A から音楽 B にかけて「リズム」と「強弱」に違いがあると解答している。また、生徒 B は「リズム」と「調」に

表 9 題材の概要

題材名	曲のしくみを理解して、よさを伝えよう
教材	「白鳥の湖」より「情景」
題材目標	<p>○ 音楽を形づくっている要素同士のつながりや曲想とのかかわりに関心を持ち、他者と自分の考えを照らし合わせながら自己の考えを作ろうとするなど、鑑賞の学習に主体的に取り組もうとしている。</p> <p>○ 音楽を形づくっている要素同士のつながりや曲想とのかかわりを理解して、解釈したり価値を考えたりし、根拠を持って批評するなどして、音楽のよさを味わって聴くことができる。</p>

違いがあると解答しており、両生徒が問題 5 で使用した「音色」とは「リズム」や「強弱」、「調」を誤用したものではないかと考えられる。

このことから両生徒は自分が感じ取ったイメージについて音楽を形づくる要素を適切に用いて説明することができていないと考えられる。全体の調査結果においても同様の課題がある者は半数以上いた。このような音楽を形づくる要素の誤用をなくすために、使用する要素の概念を明確にした指導が必要であると考えられる。

6 授業実践Ⅱ

(1)授業の概要

授業実践Ⅰと調査の結果を受けて、平成 28 年 10 月 6 日、11 月 2 日、9 日に宗像市立中央中学校の第 3 学年の生徒 113 名を対象に授業実践を行った。取り上げた題材の概要については表 9 に示した。実践では授業実践Ⅰの改善案を基に単元計画を行い、『「白鳥の湖」より「情景」』を教材として取り上げた。3 時間共通して、生徒たちに「中央名曲探偵事務所」という架空の探偵事務所の調査員になり、曲にまつわる依頼調査と調査報告書の記入を行う課題を提示した。

(2)授業展開

①1 時間目の授業展開

導入ではプロジェクターを用いて学習課題を提示した。ここでは生徒に自分たちが「中央名曲探偵事務所」の調査員であること、調査依頼の内容、作曲者と曲名について把握させた。そして、本時の課題として楽譜に残された暗号を提示した。暗号は「音色（楽器の種類）」、「旋律」、「強弱」を中心とした楽曲の構成を表している。授業展開では暗号の「矢印」と「大きさ」が何を表しているか

表 10 1 時間目授業の流れ

	学習活動・内容	○教師の手だて
導入	1 学習課題の確認と 楽曲の鑑賞 ・楽曲の雰囲気	○ プロジェクター を使って課題提示 を行う。
展開	2 暗号の予想立て ・矢印→曲全体 ・○□の大きさ→強弱 ・○□の形 ・○□の色 3 暗号の謎解き ・○□の形→旋律 ・○□の色→音色	○ 矢印と大きさに ついては全体で確 認する。 ○ 必要に応じてヒ ントを与える。 ○ 全体共有の際は、 暗号と曲や楽譜と を照らし合わせる。
終末	4 暗号の謎のまとめ ・曲の構成	○ まとめ方の視点 を提示する。

表 11 2 時間目授業の流れ

	学習活動・内容	○教師の手だて
導入	1 前時の振り返りと 本時の活動の確認 ・曲の構成	○ 「名曲探偵通信」 を使って前時の振 り返しを行う。
展開	2 楽曲を鑑賞し、イ メージを膨らませ る。 ・楽曲のイメージ 3 「白鳥の湖」のあ らすじを知り、第2 幕を鑑賞する。 ・「白鳥の湖」 ・バレエについて	○ 前時に生徒が書 いた説明文を取り 上げる。 ○ 「白鳥の湖」全体 のあらすじを捉え させ、第2幕を鑑賞 する。その際、“情 景”以外の曲につい てもダイジェスト で紹介する。
終末	4 再度楽曲を鑑賞 し、付け加えがあれ ば書き込ませる。 ・具体的な楽曲のイメ ージ	○ はじめに記入し た曲のイメージと 見比べさせる。

表 12 3 時間目授業の流れ

	学習活動・内容	○教師の手だて
導入	1 前時の振り返りと 本時の活動の確認 ・曲の構成 ・曲のイメージや情景	○ 「名曲探偵通信」 を使って前時の振 り返しを行う。
展開	2 イメージを想起さ せる音楽の要素の 検討 ・音楽を形づくる要素 ・要素と曲想 3 全体で共有 ・音楽を形づくる要素 ・要素と曲想	○ オーケストラの 楽器について写真 を提示し、確認す る。 ○ 曲や楽譜と照らし 合わせながら共有 を進める。
終末	4 紹介文の記入 ・曲の構成や要素と イ曲のメージや情 景のかかわり	○ 紹介文を書く際 のポイントと条件 を提示する。

全体で確認した。その後、「色」と「形」が何を表しているか個人で予想したのちに班で話し合うことで課題を解決した。

②2 時間目の授業展開

導入では1時間目の活動の様子や生徒の記述を掲載した「名曲探偵通信」を用いて前時の振り返りを行った。前時に書いた説明文の中には、楽曲のイメージについて触れているものが数名いた。これは、本時の学習内容につながるものであったため、それらの生徒の記述を取り上げ、本時の学習課題の提示を行った。展開では「白鳥の湖」のあらすじを知ることと実際にバレエシーンを鑑賞することで楽曲に対するイメージを想起する活動を行った。

③3 時間目の授業展開

導入では前時と同様に「名曲探偵通信」を用いて前時の振り返りを行った。展開では、前時で想起した楽曲に対するイメージと音楽を形づくる要素を結びつける活動を行った。音楽を形づくる要素としては1時間目でも取り上げた「音色（楽器の種類）」と「強弱」を中心に検討した。学習活動は、まず個人で検討したのちに4人班に分かれて拡大表にまとめさせた。最後に、3時間のまとめとして楽曲の紹介文を書く課題を与えた。課題については1週間後に回収した。

(3)授業の工夫

①暗号の改善

授業実践Ⅱでは図4に示すように授業実践Ⅰで提示した暗号の改善を行った。改善点は表13にまとめた。授業実践Ⅱでは1時間目に暗号の謎解きを行うことで、楽曲の構成に生徒自身が気付くことをねらいとした。授業では、謎解きの方法を理解するためにまず、全体で矢印と大きさが何を表しているかについて全体で考えた。その後、色と形が何を表しているか、個人活動や班活動を行いながら検討していった。

生徒の学習プリントを見てみると、多くの生徒が楽曲の構成を自分の言葉で説明することができており、暗号の改善をしたことの効果があったと考えられる。

②記述のポイントや条件の提示

1時間目と3時間目の終末では、生徒には記述のポイントや条件を提示した。提示した記述のポイントと条件は図5、図6に示した。

③教材「名曲探偵通信」の活用

2時間目と3時間目の導入では「名曲探偵通信」を活用した。通信では、前時の学習活動の様子と生徒の学習プリントの記述内容をまとめた。また、

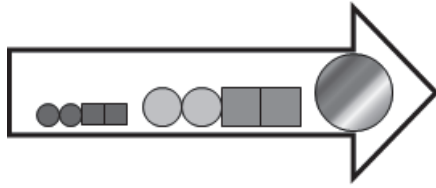


図4 授業実践Ⅱで提示した暗号

表13 授業実践Ⅱにおける暗号の改善点

	授業実践Ⅰ	授業実践Ⅱ
色	モノクロ 特に表しているものはなし	カラー 音色(使用楽器)を表す 青→木管楽器(オーボエ) 黄→金管楽器(ホルン) 緑→弦楽器 虹色→様々な楽器
形	●(1種類) 繰り返される旋律を表す	●, ■(2種類) 繰り返される2つの旋律を表す
大きさ	音の強弱	音の強弱
矢印	曲の流れ	曲の流れ

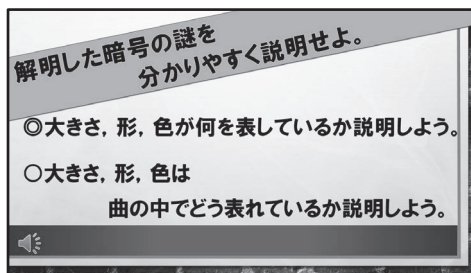


図5 1時間目に提示した記述のポイント

<条件>		
○ 200字以内で書くこと。		
○ 音楽のはじめの部分、中間部分、おわりの部分へと順に変化していったときのあなたの気持ちや想像したこと(情景)を具体的に書くこと。		
○ 音楽の要素を表す言葉を下から二つ以上使用して書くこと。		
音色(楽器の種類)	リズム	旋律
音と音とのかかわり合い	構成	調
音高	速度	強弱

図6 3時間目に提示した記述の条件

2時間目は生徒の記述内容の中から本時の活動につながるものを取り上げ、本時の活動へつなげた。
④音楽に対する「イメージや感情」と「客観的な根拠」のバランスの考慮

授業実践Ⅱでは6月に行った調査の考察①から音楽に対する「イメージや感情」と「客観的な根

拠」のバランスを考慮した学習活動を目指した。バランスを考慮するにあたり、3時間を通して、「客観的な根拠」を見つける、「イメージや感情」を想起する、2つを結びつけるといった段階的な授業の構成を計画した。

(4) 考察

①楽曲の構成の捉えについて

1時間目は、生徒が説明するためのポイントとして図5のように2段階の課題「大きさ、形、色が何を表しているか説明しよう。」「大きさ、形、色は曲の中でどう表れているか説明しよう。」(以後、前者を段階1、後者を段階2とする)を設定して考えさせた。段階2については応用的な課題としてできる人は取り組んでほしいと伝えた。生徒が書いた記述の評価基準はさらに5段階へ細分化し、評価の結果を表14にまとめた。学習プリントで作成した「表をそのまままとめている」ものは段階1に該当し、3と評価した。「要素の変化に触れながら曲の構成に触れている」、「複数の要素の変化に触れながら、もしくは要素の具体的な変化に触れながら全体の曲の構成を説明している」ものは段階2に該当し、それぞれ4,5と評価した。この表から生徒に示した2段階のうち、より高度な課題(評価基準4,5)に取り組めたものが出席者106人中66人(約58%)いた。さらに、この66人のうち22人は「音色(楽器の種類)」、「旋律」、「強弱」のうち複数の要素を絡めて説明することができていた。このような生徒の記述が見られたのは、「暗号の謎を解明する」というパフォーマンス課題に取り組む中で、「音色(楽器の種類)」や「旋律」、「強弱」を聴き取る技能やそれらの要素に対する知識を活用して説明ことができたからだと考えられる。

②音楽に対する「イメージや感情」と「客観的な根拠」について

授業実践Ⅱのまとめとして3時間目の終末に楽曲の紹介文を書かせた。紹介文を書く際は前述のように図6に示した記述の条件を提示した。この条件は調査の問題5(表7)と対応させたもので、調査の際と同じ観点で分析した。分析に用いた観点は図7に示した。調査の問題5では、すべての観点を満たしている生徒は調査時の出席者106人中24人(約23%)であったのに対し、授業後の紹介文においてすべての観点を満たしている生徒は回収人数105人中48人(約46%)いた。全ての観点到に気付いた生徒が増えた要因としては、3時間を通して楽曲の構成を捉える活動、イメージを想起させる活動、それらを結びつける活動と段階を

表 14 1 時間目の 5 段階の評価規準とその割合

段階	基準	規準	人数	割合
2	5	複数の要素の変化に触れながら、もしくは要素の具体的な変化に触れながら全体の曲の構成を説明している	22	20.8
	4	要素の変化に触れながら曲の構成に触れている	40	37.7
1	3	表をそのまままとめる	37	35
	2	まとめ方に欠落がある	5	4.7
	1	無記入またはそれに等しい	2	1.9
		合計	106	

自分の気持ちや想像したことを音楽 A、B、C の変化に触れて具体的に記述し、かつ選択肢から要素を 2 つ挙げ、適切に用いているもの。

α 1 α 2 α 3

β 1 β 2

図 7 3 時間目の記述に用いた観点

踏んだ授業構成にしたためだと考えられる。

③イメージの想起について

2 時間目の授業実践の中でイメージしたことを上手く表現できていない生徒が多数見受けられる課題が残った。その原因としては 2 点考えられる。

1 点目は生徒たちの思考の流れと授業構成の流れが一致していなかったことである。授業実践Ⅱでは 1 時間目に客観的な根拠の理解、2 時間目に音楽に対するイメージの想起、3 時間目に客観的な根拠とイメージを結びつけるという授業構成で行った。しかし、授業実践Ⅰの 2 時間目において客観的な根拠を見つける前にイメージの想起をする時間を設けたところ、イメージと客観的な根拠をスムーズに結びつけることができた姿が見受けられたことから、生徒たちの音楽を鑑賞した際の思考の流れとしては、はじめに音楽に対するイメージを想起したのちに、イメージを想起させた客観的な根拠を見つける方がより良いのではないかと考えられる。

2 点目は、音楽に対するイメージには正解はないため、答えにくさがあることである。音楽科における鑑賞指導においては音楽に対する「イメージや感情」と「客観的な根拠」を結びつけることが求められている。客観的な根拠については誰が答えても一致するような普遍性ある一方で、イメージについては一人一人答えが違う。このようなことを生徒が理解し、自分の感じたことを表現できるような発問が求められると考える。

7 おわりに

ここまで、音楽鑑賞における課題を改善し、音楽鑑賞において求められる力をより育むべくパフォーマンス課題を取り入れた授業展開についての研究を進めてきた。授業実践Ⅰと鑑賞に関する調査から明らかになった授業展開のポイントを授業実践Ⅱに生かしたことで、生徒の記述に音楽に対するイメージと客観的な根拠を結びつけた表現が調査時よりも多く見られた。また、生徒たちの思考と授業構成の視点からも課題の改善が見られた。これらは本研究の成果だと言える。

なお、今後考えておくべき課題としては、「イメージや感情」と「客観的な根拠」のバランスを考慮した授業構成の検討が挙げられる。研究を進める中で、音楽科の鑑賞指導において、音楽に対する「イメージや感情」と「客観的な根拠」のバランスを考慮することの重要性を見出した。しかし、授業実践Ⅱでは 2 時間目のイメージを想起する活動でつまづいている者が見られた。このことから、イメージと客観的な根拠を結びつけるために効果的な授業構成を検討していきたい。

また、「暗号を解く」というパフォーマンス課題は対象学年を中学 3 年生に限定しており、取り上げた楽曲についても『「白鳥の湖」より「情景」』でしか実践できていない。そこで今後は様々な楽曲に本研究を生かし、他学年においても授業の構成を計画、実践していくことで、さらに研究を深めていきたい。

主な引用・参考文献

- 小島律子・横山真理 2012 パフォーマンス課題における音楽的思考過程の質的評価. 大阪教育大学紀要. 第 V 部門 61 1 59-72
- 小山英恵 2013 音楽科におけるパフォーマンス評価に関する一考察: 「真正の評価」論に焦点をあてて. 日本学校音楽教育実践学会紀要 17 3-14
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2010 特定の課題に関する調査 (音楽) 調査結果 (小学校・中学校)
- McTighe, J. & Wiggins, G., 西岡加名恵訳 2005 理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」理論と方法 日本標準
- 宮下俊也 2010 音楽鑑賞学習における批評の構造と思考過程の検討. 日本学校音楽教育実践学会紀要 14 251-262
- 文部科学省 2008 中学校学習指導要領解説音楽編 教育芸術社
- ワシントン公教育管理局 HP <http://www.k12.wa.us/Arts/PerformanceAssessments/default.aspx#Music> (参照日 2016. 1. 3)